

市原市歴史と文化財シリーズ 第六輯

歴史散歩資料

市原市菊間周辺の遺跡と文化財

市原市地方史研究連絡協議会



子光院

中心
霊塔

字
雲ノ境

菊間
八幡
神社

fe6bc862-9e20-43ed-bbd5-0a04377ee10c

九 菊 間 藩

竹 内 克

静岡県にあった沼津藩が、徳川瓦解とともに千葉県市原市にやってきて、菊間藩となった。百三十年前のことである。

藩主の水野家は、徳川宗家とゆかりの深い譜代大名だけに、維新とともにいち早くリストラされ菊間に移封された。時の流れは速く中央集権樹立へと向かう本流の中で、菊間藩は泡沫うたかたのごとく消えてゆく。言ってしまうとそれだけのことだが、短命に終わった菊間藩に、時代に翻弄された一譜代の軌跡を辿ってみたい。

それではなにが徳川瓦解を招いたのか。内政の行き詰まりもさることながら、直接の原因は外圧、つまり市場開放を迫る外国の圧力だった。いまと同じである。その外圧が内圧に転化したとき、幕末の動乱となり太平の天下は、はじけて揺れた。

ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊の黒船四隻が、江戸湾浦賀沖に現われて日本の門戸を叩いたのが嘉永六年（一八五三）。この年、ロシアのプチャーチンも長崎に来航している。

翌年安政元年には、ペリー提督は再びやってきて、強腰で幕府に日米和親条約を調印させた。下田、函館の両港が開港し世界の新興資本主義国アメリカに、扉を開く端緒を作った。アメリカの砲艦外交にあわてふためいた幕府の周章狼狽は、それまで政治に関与しなかった天

皇親政への期待となり、さらに雄藩（外様大藩）が政治の正面に躍り出て、幕藩体制のバランスが崩れていった。

次にアメリカが求めたものは、実質的な開放、つまり通商条約の締結である。大老井伊直弼はアメリカの巧妙にして、強引な力に押し切られ勅許を待たずして、安政五年（一八五八）日米修好通商条約に調印した。

大老の強権政治に反対する水戸、薩摩浪士に襲われ、一八六〇年直弼は暗殺された。万延元年三月三日の桜田門外の変である。

これにより幕府の権威は失墜し、尊皇攘夷の炎が燃えさかった。しかし外国の力の恐ろしさを知った雄藩は、看板を尊皇討幕へと変え、新時代の到来に備えた。そしてついに慶応三年（一八六七）十二月九日、王政復古の大号令が発せられ、二百六十五年続いた徳川政権は、十五代慶喜でその幕を閉じた。

むろん簡単な幕引きではなく、その後血で血を洗う内戦が続いたが、その間徳川恩顧の譜代藩が、あっさりと新政府側についていった事実を、菊間藩のことに入る前にまずのべておきたい。

さて沼津藩、水野家のことである。もともと沼津藩は甲斐武田一族が、小田原北条氏の攻撃に備えて天正年間（四百年前）駿河の外れに築いたものだが、武田氏滅亡のあとは徳川家康の所有となった。

そして徳川一門が城主となって続き、いったんは廃城となったが、安永六年（一七七七）水野忠友が新しく城を作り、明治まで水野家が存続した。本丸、二の丸、三の丸、外濠があつて、寛政（一七八九）

一八〇〇)のころには、三万石の城下町は大いに賑わった。

この水野家は、家康の生母の於大^{おだい}の方の実家という名門の家柄であり、歴代藩主も老中職や老中首座の重職を勤めている。幕末維新三百藩総覧の沼津藩の項には、石高五万石、席次帝鑑の間詰(譜代城主級)家紋、丸に立沢瀉^{おしだか}紋、最後の藩主、水野忠敬^{ただのり}と書いてある。格式高き名家である。

その忠敬は、慶応二年(一八六六)十月家督を継いだ。四年正月には鳥羽伏見の戦いとなり、戊辰の内戦へと入っている。

忠敬は尾張名古屋藩、徳川慶勝の勸告を受けて、この年の二月にはいち早く新政府に恭順の意を示した。そして甲府城代を命ぜられたが、反政府軍の鎮定に手ばかりがあり五月には城代を罷免された。しかし老臣が責任をとり忠敬は赦された。徳川恩顧の譜代大名は次々と新政权に忠誠を誓ったが、沼津藩水野家も例外ではなかった。

内戦とは別に、内政も動き出した。最後の將軍慶喜は上野寛永寺に謹慎。徳川宗家には御三郷の一門、田安家から六歳^{いよそじ}の家達^{いえだち}が後継ぎに入り、駿河府中藩(静岡)七十万石の成立となった。

これに伴い、駿河・遠江にいた七人の大名は国替えを命ぜられ、旧幕領が四十万石以上あった房総に玉突きで移封されてきた。その一人が菊間に来た水野忠敬五万石だった。実際には市原郡内では二万三千七百石で残りは安房の国の北を与えられた。慶応四年(一八六八)七月十三日、菊間村への移封が正式に決まり、八月三十日には沼津城を引き渡した。あわただしい旅立ちの支度である。新政府から転出費用



千 光 院

として毎年現米千石、金一万五千両が三年間支給されることになり、これとは別に引越し代として一万三千両が下賜された。気高き鶴が一羽、菊間の原野に降り立つ感じである。

一方藩士たちは、城明け渡しによって近隣の村に分宿して、不自由な生活を余儀なくされたので、菊間の新天地に大いなる夢と期待を抱いたといわれる。慶応四年九月八日で、年号は明治に改まった。転宅は明治元年（一八六八）から五年まで波状的に行われている。なにぶんにも急な転勤命令であり、藩士たちは家を解体して海岸まで運び、舟に乗せて今の市原市八幡の浜本まで運搬し、積み替えたあと村田川をさかのぼって、菊間に至っている。

その尖兵となったのが、土地の測量や町割りの仕事にあたる先遣隊で、八幡宿の旅籠、藤田屋を仮陣屋とした。その藤田屋は私の家で今は壊れてないが、古い家の間取りは覚えていいる。正面の真ん中に黒光りのする大黒柱があり、そこに木彫りの水野家の沢瀉紋（せまが）がかけられていたと聞いている。

直径三十九センチ、厚さ七センチの重厚な家紋は、今も私の家に保存されており、裏に北という字が書いてある。沼津城本丸の北側に掲げられていたものといわれる。仮陣屋は後に菊間の千光院に移り、八幡観音町の称念寺を仮住居とした隠居水野忠寛は菊間徳永台に移った。

殿様の水野忠敬は一旦江戸屋敷に入り、そこから陸路市原郡に来ていいる。明治二年（一八六九）七月二十六日で、十八歳だった。すでに

版籍奉還のあとで、新政府から菊間藩知事に任命されていた。

奉還後は新政府から禄高の一角を家禄として支給された。沼津をでる時は大名行列だった殿様も、菊間に着いたときはサラリーマン管理職の一地方行政長官になっていた。

こうした状況の変化から、当初計画していた菊間の字、雲の境（今の忠霊塔付近）の数千坪にわたる藩庁建設は、土地の造成と土台をまわした段階で、明治四年（一八七一）廃藩置県を迎えて中断された。藩庁あとには水野忠敬の碑が建ち、名残を留めている。

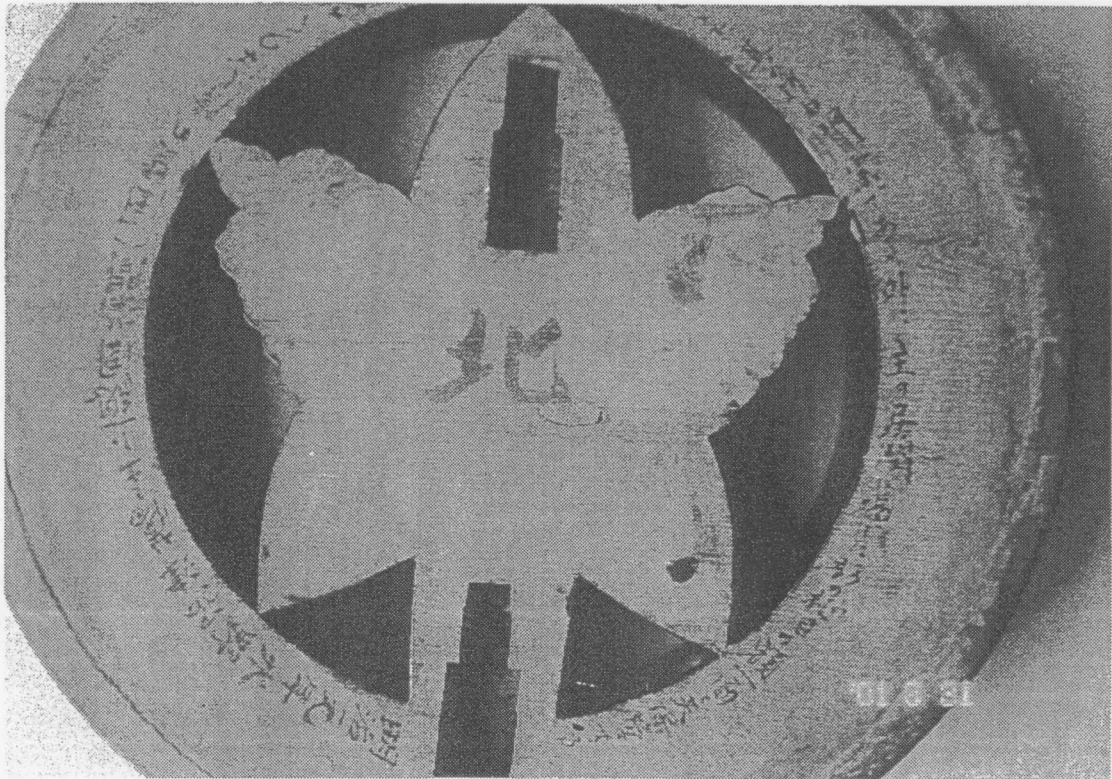
これより先、鐘楼を備えた宏大な御殿と、二階建ての医局が建設され、時を告げる鐘の音は、水野家のご威光を村内に響かせていた。前者は廃藩置県で木更津県の管理に移り、後者は菊間村役場として使われた。木更津県は千葉県となつて、新政府の中央集権化はさらに進み、水野忠敬は東京在住を命ぜられた。

当初は藩そのものの移転を考えていた菊間藩では、一時は藩士の戸数が菊間のほか、大厩、山木、草刈などにまたがって六四四戸となり、人口も数千人に増えた。

市原周辺には大きな城下町がなかったので将来の繁栄を見込んで、旅籠や寿司屋、そば屋や銭湯までできて賑わった。しかしその繁栄も二年間で、秩祿を失なった旧藩士は土地を開拓して茶の栽培をしたりしたが、時の流れとともに居住地を離ればらになつていった。沼津を出る時は家を解体したが、菊間では藩が解体され、藩士たちは暮らしの中核を失った。城下町の夢は消えた。バブルがはじけ商人たち



水野家沢瀉紋
(藤田屋所蔵)



水野家沢瀉紋・裏側

はあてが狂った。

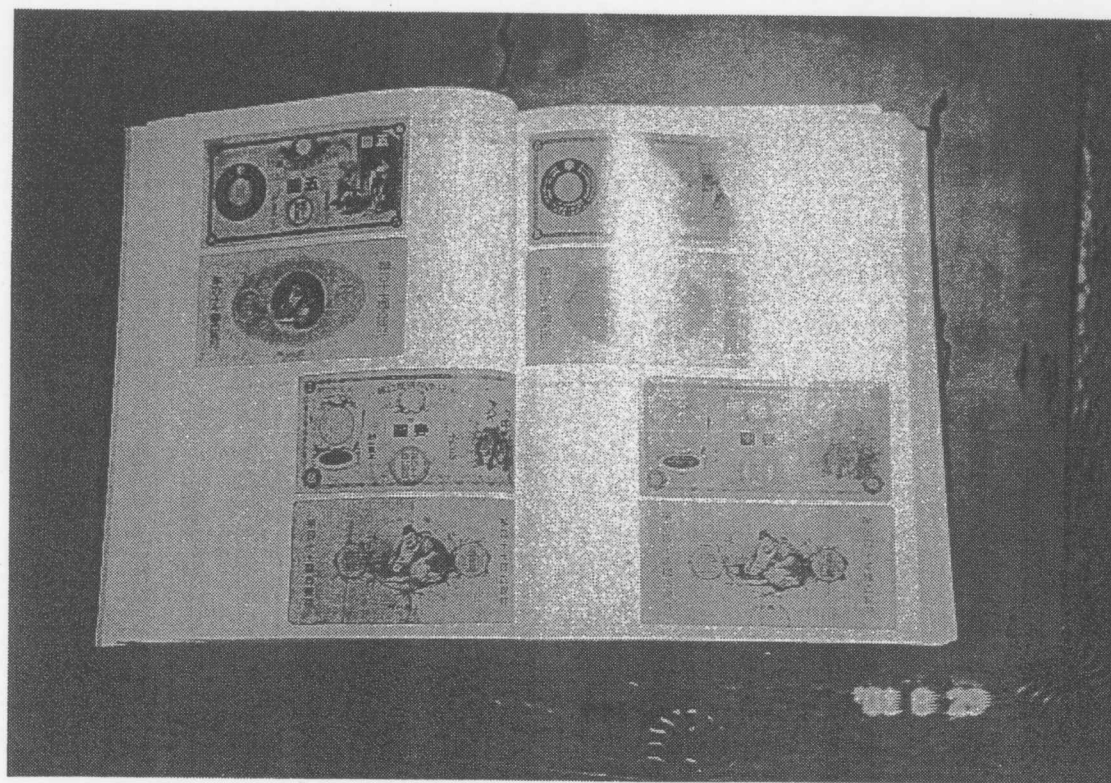
当初計画されていた陣屋は、戦鬪を想定した作りで、村田川と菊間台地の地形を巧みに利用した防禦の構えだったといわれる。しかし時の流れには抗しがたく、建物は藩庁作り中心に進められたが、藩士の気持ちは藩がこれまで通り機能するのか、変わるとすれば時流はどちらへ赴くのか、大きなとまどいがあつたにちがいない。

かてて加えて藩士たちが移り住んだ房総の地は、戊辰戦争で敗れた旧幕臣や各藩の脱走者が逃げて隠れていたところであり、最初に市原にやってきた沼津藩士たちには、不安があつたにちがいない。その藩士たちが住んでいた武家屋敷や長屋が、菊間の徳永台に長く残っていた。その長屋に住んでいたと親から伝え聞く子孫たちがいまでもいる。

一方沼津藩には、明親館という藩校があり菊間藩になつても、その名前を継承して武術と学問を教えていたが、明治五年（一八七二）学制が発布され、菊間小学校となつた。先生はすべて旧菊間藩の藩士だった。中には私塾を開いた人もあり、その建物跡が今も山木に残っている。フタマタ学校（漢字は分からない）といった。授業料はただで、侍のボランティア活動だった。

水野家は明治十一年（一八七八）、資本金九万五千円で八幡銀行を設立した。水野忠敬頭取印の五円紙幣が残っている。変遷を経て北陸銀行になつたと銀行史には書いてある。水野忠敬は歌人としても有名である。文の人でもあつた。

忠敬は日露戦争が始まつた三年後の明治四十年（一九〇七）に五十



八幡銀行のお札

4

4

七歳で他界した。水野家の墓所は、家康の生母於大の方の眠る東京小石川の伝通院である。

忠敬は生前、菊間に帰ることもあり、小学校の全校生徒が出迎えた。当時は貴重品だった雑記帳をみんなにくれた。殿様の旧宅は宏壮で掛軸やらなんやら、色々なものがあり、風俗画を見に連れて行ってもらったという人もいた。開放的な雰囲気だったようだ。

殿様の子供は東京に居住したが、太平洋戦争中には菊間に疎開してきた。殿様の孫の忠和氏と仲よしだったという人も地元にいる。戦後家族は東京に引き上げたが、同窓会には出てくれないと、小学校時代の写真を見せながら、その同級生は私に話した。

写真は祖父の殿様とよく似ている。祖父、孫とも最後の將軍、徳川慶喜と同じく、下顎部の発達した殿様顔である。血筋は争えないものである。

藩士の子孫も数多く、地元に残っている。沼津から菊間に至るまでの生活記録を、丹念に記した岡田程八氏の子孫も、菊間に暮らしている。その筆書きの日記は、くずした字で書いてあって、とても私には読めないが、菊間藩研究者には欠かせない資料である。その原本は、岡田程八氏の子孫が保存している。また沼津市の教育委員会では、岡田日記の現代字訳をもっていると聞いている。

菊間ばかりではない。八幡にも菊間藩士の子孫は広く散在している。長い間、大河内病院を開業していたお医者さんもその一人で、菊間藩の家老の子孫である。

その子息が大河内一雄さんで、旧制千葉中学校を出たあと武蔵高等学校に入学し、東京大学医学部を卒業し、現在九州大学の名誉教授である。血液学の権威だと聞いている。奥さんはドイツ人である。もと沼津藩が菊間に移ったのも、国際化の波が江戸に打ち寄せ、はね返って沼津、八幡へと寄せてきたのだから、文化や人間の国際化現象も、むべなるかなである。

話は前後するが、前記藩校明親館には明治大正期の工業教育に大きく貢献した手島精一氏が学んでいる。手島氏は欧米に留学後、文部省に勤務、今の東京工業大学の設立に力を尽くした。その教育理念は虚学を排して実学を重視し、今日の科学技術教育の先鞭をつけている。その伝統は菊間藩の明親館にも生かされ、たとえば数学なら日常生活に役立つ勉強を、また筆学なら相手と意思疎通のできる文章を書けるようにとの教えだったということである。いずれにせよ、教育を重視する藩風であったことは事実である。だからこそ開校当初の菊間小学校の先生が、全部菊間藩士であったり、私塾を開く藩士がいたのである。藩の命は短かったが、いやそれなるが故に、後世の人間を育てる教育への情熱は、すさまじかったような気がするのである。

教育だけではない。広く社会に貢献した菊間藩士の子孫は実に多い。一例をのべたい。

江戸詰の菊間藩士に、山田鎗太郎という人がいた。娘の一人が八幡の山口家に嫁したが小学校の先生だった主人は、不幸にして早世した。自分も小学校の先生だったが、辞めていたため復職できず、奮起して

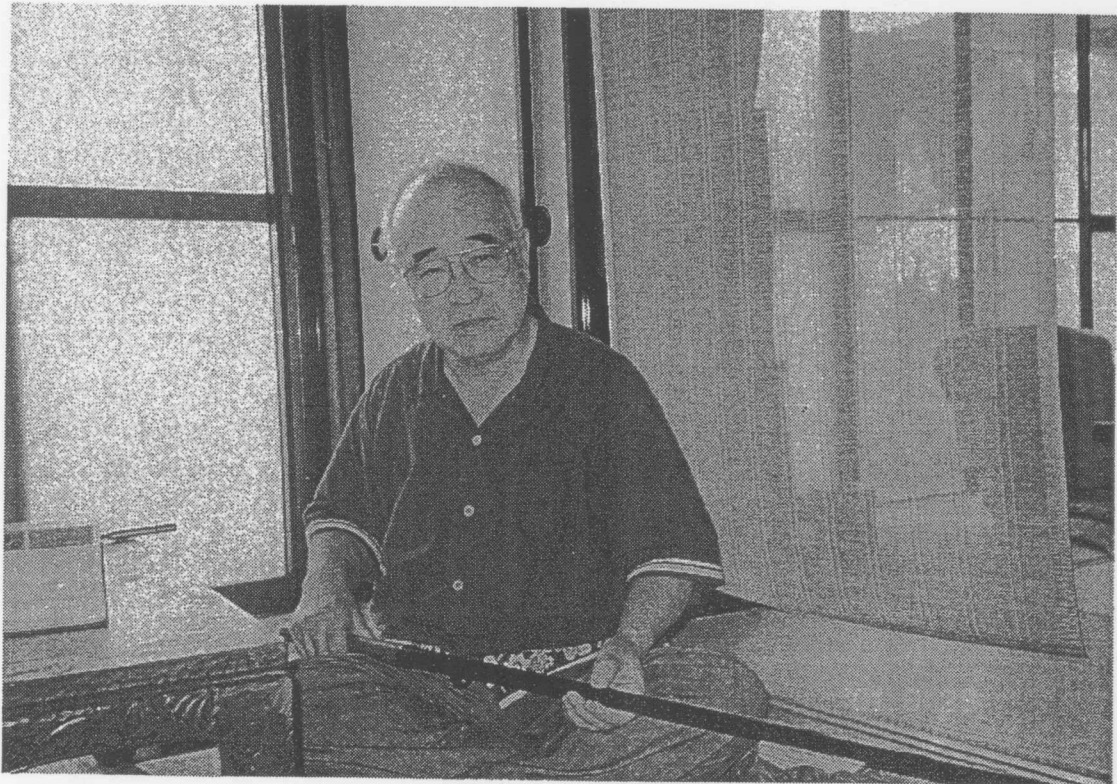
勉強し助産婦の資格を得た。山口喜久枝さんという。

その人は今年の七月、天寿を全うして、百歳で亡くなった。一世紀を生きた。生まれたのが一九〇一年、亡くなったのが二〇〇一年である。長年の功績が認められ、勲六等宝冠章をいただいている。

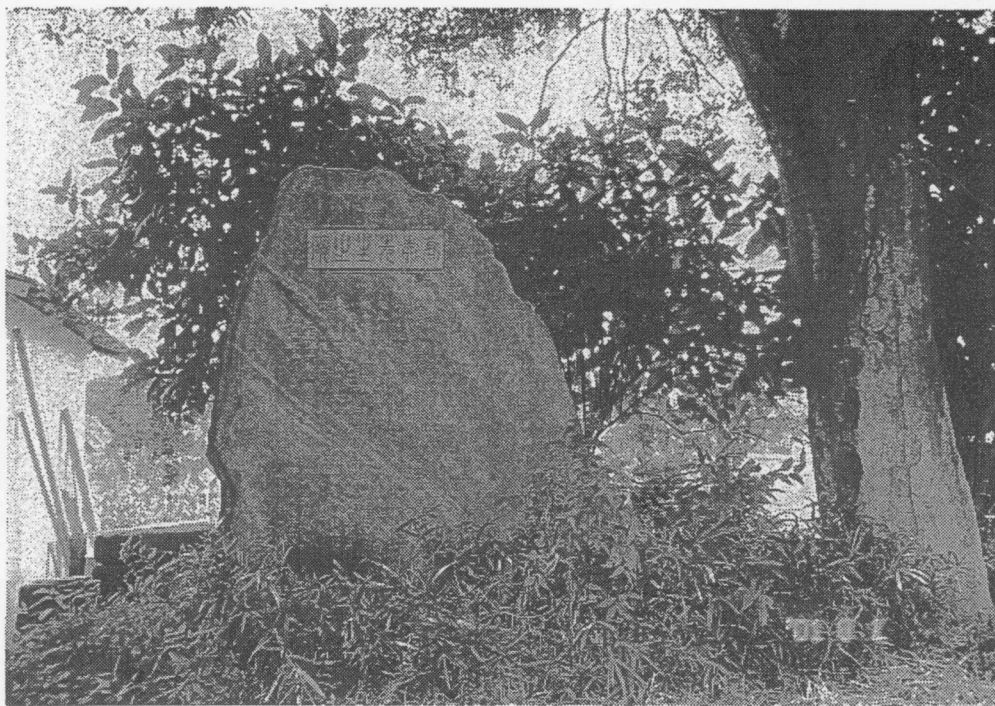
その子息洋一氏は、祖父から伝わる名刀、和泉守国貞をもっている。長さが七十一センチで、反りが一・八センチの業物である。もう一本、婦人用の短刀ももっている。小柄を差すところに、銀の箸がある。毒味用のもので、毒があると色が変わるのだそうだ。にわかには江戸と武家の匂いがした。

話はそれだけではない。殿様の孫の忠和氏が、山口氏の家を訪れたことがある。水野家が菊間に疎開していた戦争中か戦争直後のころで、お互いがまだ少年の時である。八幡の飯香岡八幡宮のお祭りの時で、菊間在住の山口氏の母の姉が連れてきたのだという。お祭り見物とご馳走がお目当てだったらしい。「物が無い時代だったからね」と山口氏が言っていた。

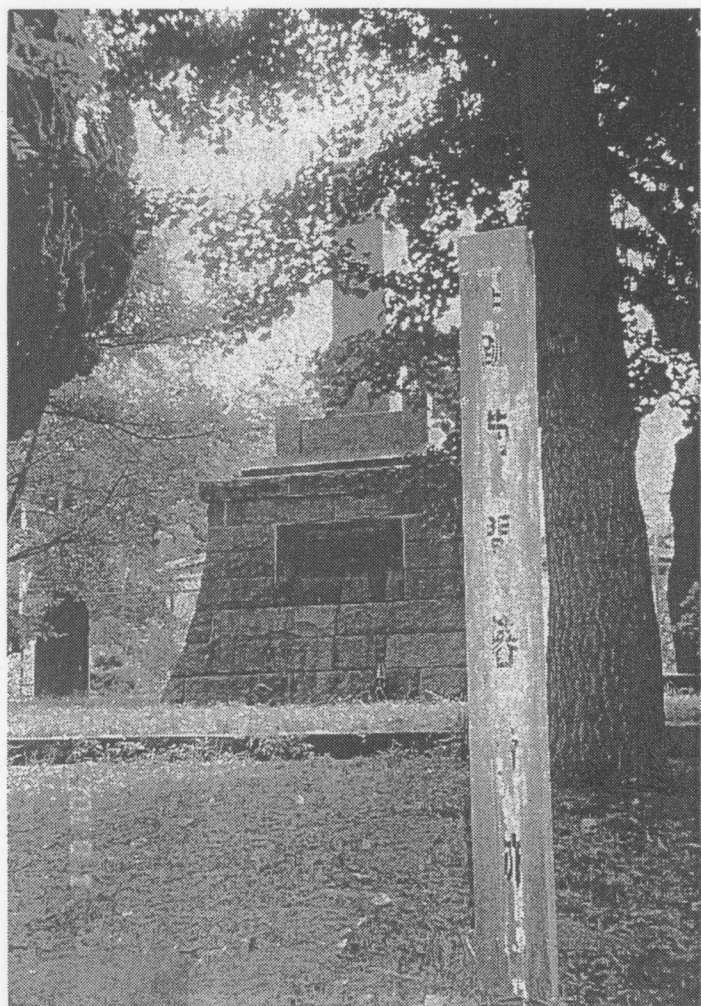
その姉にあたる人も、この時代水野家の家族の面倒をずいぶん見たらしい。その山口洋一氏も今は、水野家所有だった土地を購入して住んでいる。そこに何となくかつての、主従の絆のようなものを感じることが、今は旧菊間藩士の子孫の連携は、全くといってよいほど無いらしい。一部好事家が子孫の名簿を作成してもっている程度で、一般には特別のお付き合いは無いらしい。その意味では沼津からやってきた菊間藩も、その人たちも水のように地元にとけ込んだといつてよい。



菊間藩士の子孫 ・ 山口洋一氏



菊間藩の石碑



菊間藩庁跡の標柱・後ろは忠霊塔

沼津藩を玉突きで菊間に寄越したのは、徳川崩壊だった。その瓦解をもたらしたものは海を渡ってきた外圧だった。その大波にもう一つの時代の波が重なり、合成波になった時、菊間藩はその波間に消えた。

いま菊間台地に残るものは、石碑と記念の棒杭である。だが目に見えぬ遺産は大きい。異文化との接触によって地元に貢献した。人材は地下水脈となつて異境にしみこみ、地域の文化を育み、社会の発展に大きく寄与したと私は信じている。

八一二 菊間八幡神社

1 神社の沿革

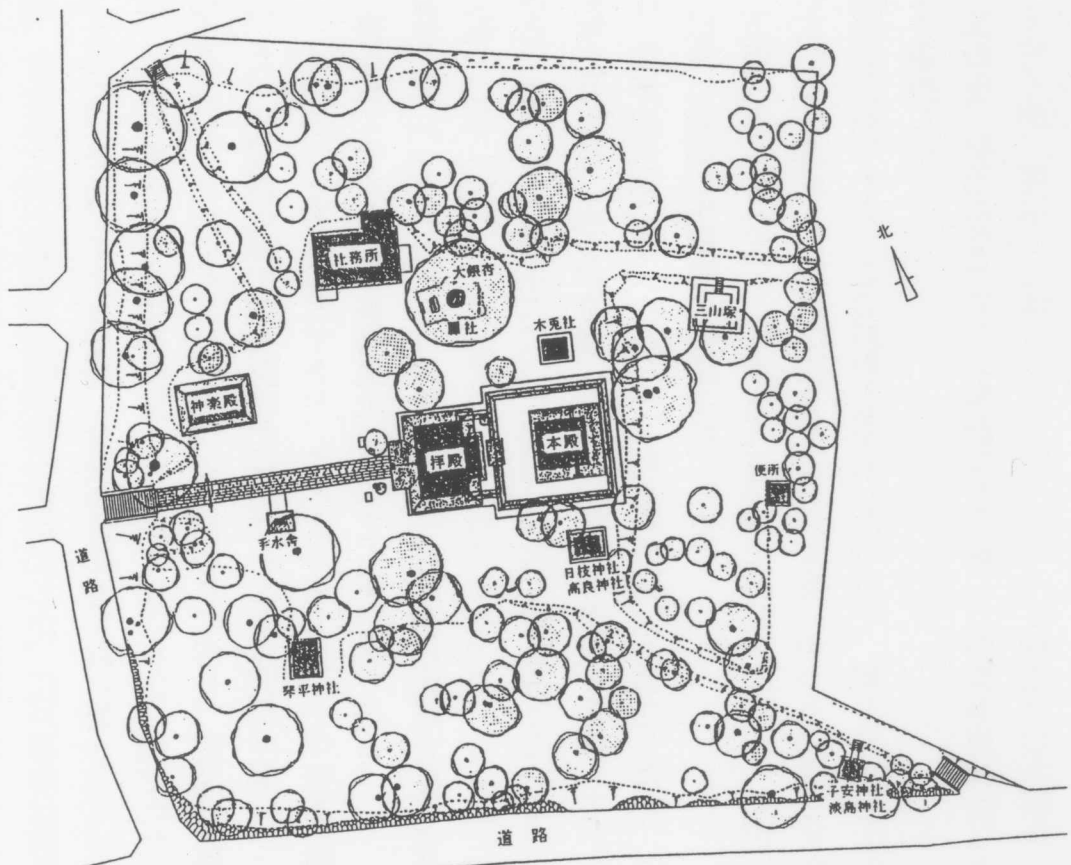
市原市は平成七年八幡神社の本殿・拝殿・瑞門・玉垣一郭と社殿内に保存されている棟札など、貴重な記録を重視して、これ等を市原市の文化財として保存を計った。

ところが翌年、銅板葺の屋根の経年による老朽化によって、数力所に雨漏れが発生し、小屋裏などの腐食が発見されたため、修理を行った。

筆者は、市の求めに応じて直接修理工事の管理に当たったが、神社の歴史的経緯の調査もを行い、工事は順当に進み平成九年三月、六ヶ月間で無事終了した。これ迄分らなかった歴史的事項等を、本稿に記載してこの度びの菊間の歴史散歩の資料と



写真1 菊間八幡神社本殿



図版1 八幡神社境内図

する。

当神社の沿革は、社伝によると古く白鳳二年まで遡り、斎主は久々麻国造大鹿直、天穗日命ノ末是者が神主の大祖也と言う。

祭神は、日本武尊・武甕槌命を祀り、神社に残る古文書に長保二年(一〇〇〇)当社再興とも書かれ、本殿内には平安時代に造られたと考えられる、隨身立像が二軀一對で古色蒼然として残り、神社の歴史の深さを窺せる。

治承四年(一一八〇)にいたり源頼朝の祈願により、千葉常胤が鎌倉より『大鯨尊』を勧請した神社で、以後若宮八幡宮とも呼ばれた。天正十九年(一五九二)二月には、徳川家康が朱印地二十石を寄進したという。中世以前、当社の名称を伝える記録はないが、江戸時代十八世紀以降の棟札など二十五枚が保存され、社殿の整備状況を知ることが出来る。

これ等の記録によると、現在の本殿は延享五年(一七四八)に神主根本治胤がこれ迄、代を重ねて修復して来た社殿を、老朽が激しいため、社叢の杜から採り出した木材で再興したが、現在の本殿である。このとき玉垣・瑞門も落成した。

このうち、治胤は満胤と改名宝曆二年(一七五二)鐘楼も建設している。

文化十一年(一一八四)この頃、別当寺との間で争いが続いており、代官所に提出した訴状の中に、八幡神社の裏の大杉を売り渡し、採り倒す際、ひかえ綱が切れて本殿の屋根を、壊したことが記されている

が、その時既に八幡神社の屋根は銅板で葺かれていたことが分かった。

この頃屋根を銅板で葺くと言ふ事は大変な意味があり、何故なら銅板で屋根を葺く事が出来るのは、江戸幕府、徳川家に縁りのある建物か、またはそれと同等な意味を持つ建物にしか、江戸幕府は許さなかつたからである。それが当時、菊間の片田舎に既に葺かれていたことは、大変な驚きで日本の建築史上に於いてはこれ迄、槌でたたき出し粘土を焼いた瓦形の銅瓦は、古代より使われており、菊間八幡神社に用いた、圧延銅板葺の銅葺屋根が使用されたのは天保年間(一八三〇〜一八四三)と考えられており、それより古く、二十年程も以前に既に葺かれていたことは建築史上に於いても新発見である。

寛政七年(一七九五)には治胤、その子邦胤が神楽殿を落成させたが、文政十二年(一八二九)治胤の孫大式の代になって、神楽殿に死穢があるによって、収蔵されていた神輿三基共々焼き捨てている。しかし、翌年三月には、氏子の寄進によって神輿・神楽殿を再興している。また、翌年の天保二年(一八三一)に石造の狛犬を造立したが、この狛犬は今も能満の釈蔵院に安置されている。

天保四年(一八三三)根本大式は拝殿の再建に取り掛ったが、天保の大飢饉に遭遇し日照りが続き苦勞し三年後、やっと完成させたのが、現在の拝殿である。この拝殿を落成した時点で、琴平神社も千葉茂呂より遷座した。

其の後、明治になって二の鳥居など再建し、弊殿高良神社など修理して行くが、明治三年(一八九〇)になって神主は根本家から、天

羽常貞に替り、本殿・弊殿・瑞門・瑞垣・修理に関り今日を迎える。

これ迄、神社の経緯を簡単に述べたが、調査に當って感じた事は、天穂日命ノ末是者が神主、云々と書いたが、古文書、家系図等も古くから残り、また、西に向つて建立されているのは、八幡宿の飯香岡八幡宮の様に鎌倉時代の影響もあつて、鎌倉に鎮座する鶴ヶ岡八幡宮によつて建立されているものと考えていた。ある、歴史学の権威者は、神社の下に広がる古代条里制田園の、稲の豊作を見守り祈ることの神社であるとの指摘を受けた。しかし、「延喜式」に載る式内社また、郷社でも無いところは何是か、不明である。

また、古代より神社は神仏習合により、古くから別当寺があり神社の祀りことは別当(社僧)が行つのが当然であつた。従つて当神社にも別当寺が近くに月蔵坊・幸音坊・其の外八幡神社には二寺記録が残されているが、飯香岡八幡宮の別当寺をも兼務した若宮寺が、八幡宿駅の西前方に菊間八幡神社の別当寺として所在した。ところが、神社に残る古文書等から分かつたことは、創建当初から社家によつてのみ祀りごとが行われ、社家が根本・天羽・市川・杉本の外、時には二家程あり、社家のみによつて祀りごとが行なわれるのは、当時は特別な神社で無くては、出来ないことであつた。従つて当神社の別当寺は自然に消滅している。

このように、菊間八幡神社は古い歴史を持つ神社である。

2 社殿様式

全国的に、現在の神社様式は権現造(本殿と拜殿が弊殿で継がるエ

字形の社殿様式)が一番多く、市原市内でもだいたいこの様式であるが、菊間八幡神社は、古式の神社配置様式を留める社殿である。

本殿は、三間社流造で柱間が三間、屋根の横から見た形態の前方が水が流れるような曲線形をしているところから、流造と呼ぶ。前方の階段(木階)を登った一間の板の間は、社殿の両側に縁、縁の正面に脇障子は付くものの、吹抜けになっており、この様な造りを見世棚造と呼ぶ。見世棚造は辺鄙な山奥や、小さな社に多く見られる古い形式の社である。

今は土台が付いているが、再建当初は土台は無く礎石の上に直接建てていた。再建後更に一度解体修理したことが、痕跡等から分つていゝるがその記録は無い。また、再建当初は浜縁が正面に、腰掛けられるくらいの高さに取付いて、そこから階段を登る様になっていた。

本殿を囲郭する瑞垣(棟札には玉垣と記す)の正面には、唐破風、平入の瑞門が付いている。このような形態は本来、仏教建築の影響を受けて平安時代に造れ、中期には既に成立されていたと考えられている。現在の八幡神社は、本殿を透塀によつて囲郭され正面に瑞門を設けるが、隨身像の残るところから、もとは隨身門であつたのではなからうか。また、平安時代は摂社として高良神社・武内宿禰祀る木曳社が、瑞垣の囲郭を現在よりも大きく設えられ、囲郭内の本殿両脇に祀られ、正面には隨身立像を安置した隨身門が造立されていたであろう。尚、高良大明神・武内大明神像は、胎内墨書銘によつて天文十六年(一五四七)別当源長が、仏師大蔵丞に彫刻させていることが分つた。

其の後、鎌倉期に入ると拝殿の造立があったと考えている。この頃の社殿の造は、昨年行った歴史散歩で見た、府中日吉神社などの様に屋根の両側、妻と呼ぶが簡素で飾りも何も無いが、菊間八幡神社の本殿を再建した、屋根の両側は妻飾りと呼び、江戸時代も中頃になると彫刻など賑やかに飾り、柱の横に突き出た材も、木鼻と呼び獅子・像の頭などの彫刻が取り付く様になって来る。

そして、本来もっていた建築の構造美が疎かに成り、彫刻などの飾りに目が奪われるようになって来るのは残念である。しかし、それはそれとして、日本の古い建築として、神社・仏閣は日本の建築文化を代表する建築美を供え、その建築を持つ地域にも、地域共同体の誇りとして、また、その地域を護る神として貢献している。

3 隨身立像

当、八幡神社は、先に示したように古い歴史を持つが故に、多くの発見が調査によって得られた。木造隨身像も内陣奥深く塵にまみれ陽の目を見ることも無く、一部の人の知る由であったが、この度びの調査によって明らかとなった。

直接の調査には、東京芸術大学美術学部芸術学科、教授水野敬三郎が当たったが、このような忿怒形で平安時代の武官の服装をして立つ姿は、一對の隨身像と見てよい。隨身は神社の門にまつられる守門神で、櫛石窓神と豊石窓神がこれにあてられる。（『古記事』『延喜式』

『古語拾遺』等）。隨身像としては、岡山県高野神社像、応保二年（一一六二）銘、香川県神谷神社像、岡山県木山神社像、以上各立像、東京都小野神社像、元応（一二三九）銘、倚像などが知られており、

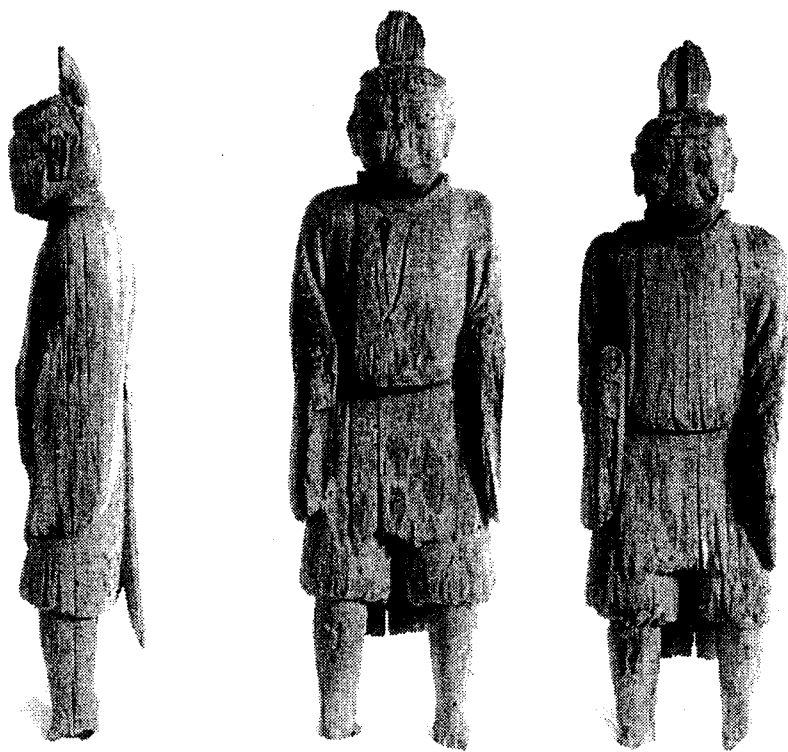


写真1 隨身立像

いま挙げた遺例のうち平安時代に遡る作は高野神社のみである。菊間八幡神社像はこれよりもさらに遡る土呂様を示すもので、隨身の現存遺品中では、最古に位置するものと見られる。その作の優秀さとあわせて、文化的な価値は極めて高い。『従って早急な保存措置を講ずることが必要である。』と進言されている。

「市原市菊間周辺の遺跡と文化財」

発行年月日 平成十三年十月十四日

発行者 市原市地方史研究連絡協議会

会長 小川 八 紀

事務局 安 達 俊 幸

市原市石川五二六の七

電話 〇四三六―八―二七二〇

印刷・製本 三陽工業株式会社